

【芸術選奨】

部門順・敬称略

受賞者 部門	受賞理由(概要)	主な作品等
安彦 文平 (あびこ ふみひら・52歳) 美術(洋画)部門 	昭和44年生まれ。 大学在籍時から学内の賞を幾つも獲得するなど、早くからその才能を認められてきた。平成14年に青木繁記念大賞展わたつみ賞、平成22・26年に前田寛治大賞展佳作第1席などの受賞を果たしたほか、「自然が作り出すかたち」展の開催など、個展やグループ展で写真画家として活躍している。 また、写真絵画専門美術館であるホキ美術館に氏の作品がコレクションされるなど、身近にある自然の姿を独自の視点と緻密な筆致で描き出す氏の作風は高く評価されている。 令和2年に開催された「超写真絵画の襲来」展では、出品作が高め合いながら写真作品を展覧しており、高い評価を得た。また、大学での指導の傍ら、長年、県民会館や面装での講習会を通じて洋画の普及にも尽力している。 現在は、宮城県芸術協会の運営委員も務めており、大学教育等を通して県の芸術活動を盛り上げていくけん引役として今後の更なる活躍が期待される。	 「九九泣き浜の蘇生」
村山 耕二 (むらやま こうじ・54歳) 美術(工芸)部門 	昭和42年生まれ。 太白区秋保に工房を構え、世界各地の砂を使いその微妙に異なるガラスの色を作風を生かしてきたガラス作家。宮城県芸術祭工芸展では平成13年宮城県芸術祭賞や平成21年河北新報社賞などを受賞し、国展でも毎回入賞するなど高い評価を得ている。平成25年には、かつて仙台地下で制作されていた「仙台ガラス」を再現した作品が2013年度グッドデザイン賞を受賞している。 令和2年度は、石巻市雄勝地区の雄勝石の廃棄粉末を溶かした「雄勝ガラス」を発表し、2020年度グッドデザイン賞を受賞した。このことは、文化芸術だけではなく産業界にとっても非常に期待が持てる話題であった。 氏は、その確かな技術をもって文化芸術への寄与だけではなく教育活動や社会活動に積極的に関わっており、その活動と成果は顕著なものがある。 今後も新しい工芸の理念と技術をもって、各地の土壌をガラス化する研究を継続し、新たな作品を制作されることを期待する。	 「Geological Glass」
太田 蓮紅 (おおた れんこう・72歳) 美術(書)部門 	昭和24年生まれ。 大内魯邦氏に師事。毎日書道展や書道芸術院展、宮城県芸術祭書道展等に出品し、受賞実績を重ねながら、書作家として自らの世界観をもって探求を怠らず常に意欲的で独創性に富んだ作品を発表している。 また、書道芸術院評議員や宮城県芸術協会理事などの役員を歴任するほか、毎日書道展東北仙台展実行委員長や河北書道展運営委員など、本県をはじめ、全国の前衛書部の中心として活躍している。 令和2年度は、第57回宮城県芸術祭書道展、第67回河北書道展、第74回書道芸術院展、第52回現代女流書100人展に作品を発表したほか、令和3年1月には氏が主催する第11回蓮紅社書展を開催するなど精力的に活動を行った。 今後も書家として創作活動に邁進されると共に、情熱をもって前衛書の次代を担う書家を育成していくことが望まれる。	 「時の魔術」
福島 隆嗣 (ふくしま たかし・60歳) 美術(写真)部門 	昭和36年生まれ。 毎年挑戦的に個展やグループ展で作品を発表し続けており、個展は平成16年の「反戦の表現」から12回を数える。 令和3年1月に開催した個展「hijra」は、冬の津軽鉄道に乗って撮った写真で、列車で移動することでファインダーに現れた様々な出会いを作品にしている。 氏は、撮るといふよりファインダー越しに現れる未知の世界というものに気づいて反応して捉えることに優れている写真家と言える。また、氏は言葉を多用するが、それは写真の説明ではなく、写真に音階のような抑揚を与える譜面のような効果を生み出している。 氏が顧問を務める高校写真部は、民間ギャラリーで卒業展を開催するなど、その活動と作品は全国でも高い評価を得ており、その後も作品を発表する作家が育つなど、氏は後進の育成にも精力的に取り組んでいる。 今後はより自由な立場で新たな作品の制作・発表を行い、美術や写真に刺激を与える存在でいて貰いたい。	 個展「hijra」より
劇団 どんちようの会 (げきだんどんちようのかい・35年) 演劇部門 	昭和61年結成。 結成以降、登米市を活動拠点として毎年公演を行っている。様々な職業の20代から60代までの幅広い年齢層で構成されたメンバーが、演劇文化を根付かせようと、地域ならではの活動を継続して行っていることが高く評価される。 令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により活動の自粛を余儀なくされたが、ラジオドラマ「ラジオ小さな劇場」を制作し、FM放送局で放送を行った。ラジオ放送は、見えないラジオに演技と演出効果加わることで聴かせる効果を生み出したと好評を得た。地域の放送局とそこで続けられてきた演劇公演が結びついて新たなスタイルが生まれ、感染終息後も続けられる新たなレパートリーとなった。 今後も学校公演等、地域に密着した公演活動を継続し、様々な世代に演劇の素晴らしさを伝え、演劇を通じて地域の発展に寄与されることを期待する。	 「ドリームエクスプレスAT」公演

年齢は令和3年11月1日現在の年齢です。

【芸術選奨新人賞】

部門順・敬称略

受賞者 部門	受賞理由(概要)	主な作品
<p>菊池 聡太郎 (きくち そうたろう・28歳) 美術(彫刻)部門</p> 	<p>平成5年生まれ。 大学院で都市・建築学を学びながら美術を考え個展等を開催してきた。インドネシア留学等で得た様々な経験を通じて、図や絵、写真、建築素材などを用いた、身の回りの生活やそれを取りまく風景についての作品を発表し、総合芸術ともいえる氏の枠にとらわれない芸術実践が宮城の美術シーンに大いなる刺激をもたらした。 令和3年2月に開催された若手アーティスト支援プログラムVoyage・二人展では、テーマの「風景の練習・Practicing Landscape」をもとに構成されたインスタレーションの展示を行い、好評を博した。 柔軟な思考が固まることなく現在の表現活動を更に突き進み、今後も優れた作品を発表されることを期待させるだけではなく、美術のみならず、学んできた建築分野での成果も見てみたいと思わせる美術作家である。</p>	 <p>「ウイスマ・クエラ」展示風景</p>
<p>浅川 芳直 (あさかわ よしなお・29歳) 文芸部門</p> 	<p>平成4年生まれ。 早くから俳誌「駒草」に参加し俳句を発表してきた、宮城県はもとより東北、そして全国の俳壇から若手俳人として注目されている俳人の1人である。 これまで、俳句総合誌等への俳句や論評などの執筆を精力的に行う傍ら、平成29年に東北の若手俳人の創作発表の場として「むじな」を創刊した。 令和2年度は、東京四季出版主催の第8回俳句四季新人賞に選ばれたほか、俳誌に新作俳句の発表を行った。11月に発刊した通巻第4号となる「むじな」は、作品だけではなく、座談会や作品論などといった多彩な記事を収録し、充実した内容の1冊となった。また、宮城県俳句協会の会報に「宮城県俳句史」を連載し、文芸家としても非常に力のあるところを見せている。 俳句表現はもとより、「むじな」の発行を通じて、宮城県だけではなく東北・全国の俳壇に新しい風を吹かせてくれるよう、一層の活躍を期待したい。</p>	 <p>「第8回俳句四季新人賞 受賞作より」と「むじな2020」</p>
<p>會田 瑞樹 (あいた みずき・32歳) 音楽部門</p>  <p>photo by Shoichi YABUTA</p>	<p>昭和63年生まれ。 打楽器のための新しいレパートリーの発展を中心に捉え、新曲の委嘱を続け、これまでに300作品以上の新作を初演するなど、意欲的な活動を行っている。 令和2年度は、10月にリトアニアで行われた聖クリストファー室内合奏団特別演奏会においてソリストとして映像出演し、新作協奏曲初演等を行い大きな反響を呼んだ。11月の東京オペラシティ財団「B→C 會田瑞樹パーカッションソロリサイタル」では、ヴィブラフォンを中心に多様な打楽器のための演奏会を行い、独奏楽器としての打楽器の可能性を示した。同月には氏の4枚目となるアルバムをリリースし、馴染み深い名曲を抒情豊かにまた斬新にアレンジした1枚となった。また、3月には大阪府から令和2年度大阪文化祭奨励賞が贈呈された。 今後も、演奏、作曲、プロデュースなどの幅広い分野で、県内は勿論、広く国内外での活躍と、打楽器のための新しい楽曲を開拓し、打楽器界の更なる飛躍に貢献していくことを期待したい。</p>	 <p>「ヴィブラフォンソロリサイタル in OSAKA」 photo by Shoichi YABUTA</p>
<p>刈谷 円香 (かりや まどか・28歳) 舞踊部門</p>  <p>photo by Rahi Rezvani</p>	<p>平成5年生まれ。 5歳でクラシックバレエを始める。高校在学時に米国のコンテストで銀賞を受賞しドイツに留学した後、スイスのバレエ団に入団、その後現在のNDT(ネザーランド・ダンス・シアター)に移籍した。令和元年にはNDTダンサーとして日本公演で出演を果たすなど、国際的に活躍している。 ダンサーとして、クラシックバレエに加えモダンバレエにも挑戦しており、自らの感性を磨きながら表現の幅を広げていくことに意欲的に取り組んでいる。 令和2年度は、ダンスクリエイション映像プロジェクトへの出演や、NDTダンサーが主催するチャリティ公演に参加するなど配信による活動を行った。また、オランダのフェスティバルプログラムにおいて自身の振付作品を発表し、配信により世界の人々に舞踊の魅力を与える活動を行っている。 洋舞ダンサーとして、振付家として今後も意欲を持って活動を行い、さまざまなコラボレーションに果敢に挑戦し、活躍の場を広げていくことを期待する。</p>	 <p>「Vanishing Twin」(作/Jiří Kylián) photo by Joris-Jan Bos</p>
<p>我妻 和樹 (あがつま かずき・36歳) メディア芸術部門</p> 	<p>昭和60年生まれ。 大学在籍時から民俗学の研究の一環として映像制作活動に取り組んでおり、その延長上で震災前の南三陸町波伝谷地区を描いた「波伝谷に生きる人びと」を平成25年に発表。その後同作品が、ぴあフィルムフェスティバルPFFアワード2014で日本映画ベンクラブ賞に選ばれた。平成29年には、震災後の続編「願いと揺らぎ」が、山形国際ドキュメンタリー映画祭2017においてインターナショナル・コンペティション部門で入選する快挙を成し遂げた。両作品は劇場公開もされている。 令和3年3月には、「千古里の空とマドレーヌ」を発表し、次世代映画ショーケース2021上映作品に選ばれている。東日本大震災を契機とした映画制作は多々あるが、県内の地域に焦点を合わせたものは多くはなく、またこれだけ継続しているのも氏が宮城に育ち学んだことが大きいと考えられ、今後も新たな作品の制作が期待される。 また、「みやぎシネマクラドル」を主催するなど県内の映像作家と市民の交流にも力を入れていることから、継続して宮城の映像文化の振興に貢献して欲しい。</p>	 <p>震災前後の南三陸を舞台にした 長編ドキュメンタリー3作等</p>

年齢は令和3年11月1日現在の年齢です。